臨時休校が明けたばかりの6月、学校近くの無人駅構内で倒れていた高齢男性を助けたとして、県立神戸北高男子ハンドボール部の3年生4人が神戸電鉄から感謝状を贈られた。救急車を呼んだり、男性の家族に連絡したりと息ぴったりの「連係プレー」。新型コロナウイルス禍で試合や練習は減っても、一緒にボールを追ってきた3年間の成果を発揮した。

（伊藤孝則）

神戸北高・男子ハンド部4人

高齢者救助 連係プレー

「必死でした」。80歳代の男性を最初に見つけた森重良さんが、振り返る。

土曜日だった6月13日の昼過ぎ。部活を終え、1人で唐櫃台駅（神戸市北区）の改札を抜けた時、「助けて」と声がした。駆け付けると、足を滑らせたらしく、階段の下で倒れていた。

痛みにうなっているが、無人駅で構内にほとんど人の姿はない。「大丈夫ですか」と声をかけていると、後から村野剛嘉さん、盛真生さん、迫田頌也さんのチームメート3人が来た。

森重さんは119番。村野さんは、男性から負傷箇所を聞き取りながら脈拍を確認し、電話を代わって消防司令に「右腕の感覚がない」と男性が訴えていることなどを伝えた。

構内のインターホンへ駆けた盛さんと迫田さんが係員に状況を説明したほか、男性を落ち着かせようと4人で話しかけ、男性の携帯電話で家族にも連絡して救急車を待ったという。

この間、わずか数分。後に、男性は右上腕を骨折していたと知った。見知らぬ人との「密」を避ける心理も働く状況にも、「助けることに頭がいっぱいで、そんなことは考えなかった」と口をそろえる4人を、顧問の山本純教諭(30)は「誇りに思います」という。

神鉄から感謝状　3年間の成果発揮

優しい森重さん。リーダー気質の村野さん。冷静に周りをよく見る盛さんとエースの迫田さん――。プレーや学校生活をずっと見守ってきたため、「とっさに役割を分担し、連係した姿が浮かびます」と話す。

3か月の臨時休校で、森重さんは「勉強に遅れが出た」と言う。進学を目指しながら、中止となった県高校総体の代替大会（8月）に向けて練習する日々だ。

長沢和弥校長は「休校中、仲間とコートで過ごすありがたさを痛感したはず。それを改めてかみ締めるきっかけになったのでは」とし、「先の見えない日々を過ごす他の3年生にも希望を与えてくれた」とたたえる。

神戸電鉄からの感謝状贈呈式は今月6日、学校であり、唐櫃台駅を管轄する岡場駅の伊藤貴樹駅長(54)は「駅員がいない状況での不測の事態。本当にありがたい」と感謝した。

村野さんは「困っている人を助けるという当たり前のことを当たり前にできて良かった」と胸を張り、他の3人もうなずいた。

唐櫃台駅の階段で、男性を救助した状況を振り返る4人（神戸市北区で）＝八木良樹撮影

のじぎく賞も

4人には20日、県の善行表彰「のじぎく賞」も贈られた。新長田合同庁舎（神戸市長田区）であった表彰式で、城友美子・神戸県民センター長は「新型コロナウイルス禍で、高校生活も制約を受ける中、心が温まる明るい話題。誇らしい」と述べた。

村野さんは「おじいさんが助かってよかった。4人がそろったから、救助ができました」と喜んだ。集大成となる大会に向け、「どの高校も条件は同じ。悔いのない夏にしたい」と誓っていた。

のじぎく賞を贈られる（左から）村野さん、森重さん、盛さん、迫田さん（神戸市長田区で）